

ヘルムート・ニュートンの性と死

文: 林 文浩 Text FUMIHIRO HAYASHI

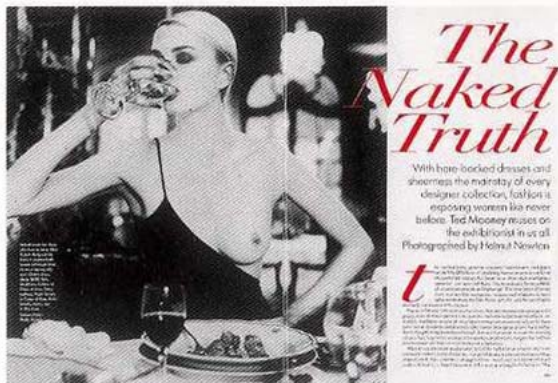
「かつては、あれほど味気なかったベルリンが奇妙に変化してしまっていた。パリケードが町中に猛威を振るっていた。不具となった兵士が公然とほろや盗んだ宝飾品を売り飛ばしていた。食料品店では労働者の女房たちが、腐ったジャガイモのことで言い争っていた。地下室のレストランで提供されるのは、ストリップ・ダンスサーだった。コカインと有毒のアルコール。夜に街路を歩けば、秘密の暗殺組織に殺された犠牲者の死体につまづいた。」(平井正「表現主義・ダダを読む」白水社)

1918年、帝政ドイツは第一次世界大戦の敗戦により、軍事的、政治的に崩壊した。そして混沌の中から誕生したのがヴァイマル共和国だった。それは、創造的な無秩序がその多様性と豊かさを示した、政治的にも文化的にも特異な時代であった。

1918年、帝政ドイツは第一次世界大戦の敗戦により、軍事的、政治的に崩壊した。そして混沌の中から誕生したのがヴァイマル共和国だった。それは、創造的な無秩序がその多様性と豊かさを示した、政治的にも文化的にも特異な時代であった。

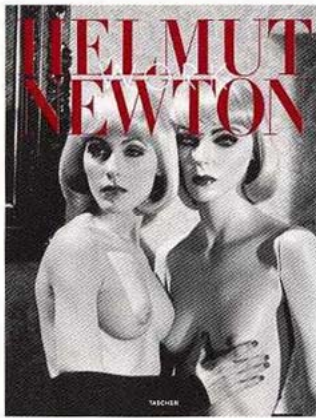
問わず首都ベルリンに遷き、跳梁跋扈し、混乱と頹廢が街全体を覆っていた。人々は、既存の秩序を一切無視して、革新的な物事に夢中になり、新しい文化を形づくっていく。そして、20世紀初頭に台頭したモダニズムの流れをより自由にラディカルに前進させようとする芸術的前衛運動は、予期せぬ敗戦に困惑する大衆の心の矛盾や虚無感を隠す上で重要な役割を果たしていった。絶望的な経済状況の中で、人々は利己的な快楽に酔い痴れ、迫り来る破綻の影を振り払う現実逃避の術として新しい芸術運動の虜となっていく。黄金の20年代、ベルリンには芸術が表現する

ための自由の全てがあった。ヘルムート・ニュートンは、1920年にベルリンに生まれた。そして、このヴァイマル時代からナチスの第三帝国へと移行していく都市の姿が、幼いニュートンの記憶の中に消える事なく刻まれたのは想像に難くない。漠然とした不安に支配された底無しのデカダンスの時代。来るべきマシーン・エイジを体現するメトロポリスの急激な変容。それは強烈なオプセッションとなって彼の作品の中に宿り続けた。





97. AMERICAN VOGUE



WORK



76. VOGUE FRANÇAIS

たのである。
1930年、ニュートンはベルリンのギムナジウム、ハインリッヒ・フォン・トライナケ校に入学する。そして36年、女流フォトグラファー、イヴァ（エルセ・サイモン）のアシスタントになり、彼女のスタジオで働き始める。

1900年にベルリンで生まれたイヴァは、20年代から30年代にかけてのベルリンの退廃的な雰囲気と女性ならではの優雅な官能性で表現したフォトグラファーである。主にダンサーのポートレートやストード、ファッション写真を撮影したイヴァは、同時代の芸術家の例にもれず、様々な実験的手法を写真の中に取り入れ

ている。特に20年代のベルリンで華開いたレヴェュー文化を彼女は愛し、そのエロティックでコミカルな雰囲気とフォートモンタージュ等の手法を駆使して見事に表現している。
しかし、ユダヤ人であったイヴァに対する弾圧は年々強まり、38年になるとナチスによってスタジオを閉鎖され、42年にはアウシュビッツの強制収容所で死亡する。一方、ニュートンは、ナチスの追手から逃れるため、両親と共にベルリンを離れる。彼はシンガポール、両親は南米へと渡った。ナチスの弾圧、両親と離れ離れの逃亡生活、師の無残な死。10代のニュートンにとって、それは想像を絶する苦難の時代だった。やが

て祖国は人類史上、最も残忍な独裁政権と共に悲劇的な最期を遂げ、生まれ育ったベルリンの街は廃墟と化した。
逃亡先のシンガポールには、2年間滞在することになる。シンガポール・ストレイツ・タイムズ誌の報道写真家としても働いたが、シンガポールでの生活は決して心地良いものではなかった。そして40年にはオーストラリアへと向かう。ここでの生活は快適だったようだ。45年には、彼にとつて初めてのカバー写真をメルボルのオーストラリアン・ポスト誌で撮影している。また生涯のパートナーとなるジュン・ブルネル（後に写真家のアリス・スプリングス）にも出会い、48年に結婚している。

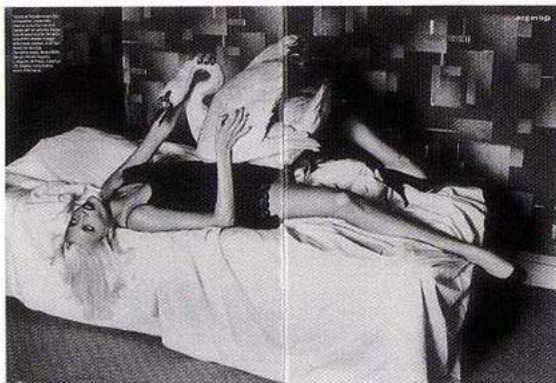
56年、ニュートンは長年住み慣れたオーストラリアからロンドンへと居を移し、イギリス版ヴォーグ誌と契約を結ぶ。奇しくもこの年は、ウイリアム・クラインが写真集「ZOOM」を発表した年でもあった。ファッション写真は新しい時代を迎えようとしていた。
ロッキン・ロールが誕生し、誰もが銀幕のスター達に熱狂した。ファッションは、もうブルジョワだけの特権ではなくなったのである。時代は急激に変化して、新しい価値観を求めた。その結果、ニュートン、クライン、ギイ・ブルダン、デヴィッド・ベイリーら新しい感覚のファッション・フォトグラファーが次々に登場してくることになる。58年には、ジャルダン・デ・モード誌の仕事のために、ニュートンはパリへと渡る。
50年代後半から60年代初頭にかけてのニュートンが撮るファッション写真には、まだあの強烈なエロテイシズムは顕示されておらず、特徴に乏しい。当時の撮影はエディターのリクエスト通りのものだったのだろう。彼がその片鱗を初めて見せるのは、63年にロンドンのメンズ・ファッション雑誌、アダム誌で撮影された「ジェームス・ボンド・ストーリー」においてだ。



95 AMERICAN VOGUE



95 AMERICAN VOGUE



94 AMERICAN VOGUE

このストーリーでは、拳銃が小道具として使われ、美女が縄で縛られ監禁されるシーンや半裸で誘惑するシーン等があり、暴力的でセクシャルな表現が随所に見られる。そして、'60年代も中頃を迎えると、ニュートンはエディターのコントロールから開放されたのか、その非凡な才能を開花させていく。ヌードのモデルは登場しないまでも、最新のテクノロジーに対するフェティシズム、窃視症の視点、乱交を想像させる男女の関係性、マネキンのように無機質なモデル、猛獣と美女といったイメージが頻りにファッショ写真の中に使用されるようになる。

インは、「露出癖は暴力の静かな側面だ。傷つけないようにとだけ注意しながら、刺激しようと目論んでいる。このことは、'60年代のファッションを左右するといっても決して不思議ではない」とヴォーグ誌に記事を書いた。この事実からもファッションの世界にとって、ニュートンが必要不可欠の存在になったことを物語っている。

'71年、ニュートンは人生の大きな転機を迎える。ニューヨークで心臓発作によって倒れたのだ。彼自身「人生が全く変わった」と語る通り、以降、ニュートンの写真は強烈なエロティシズムとフェティシズムの色を更に増していく。死の淵に立った

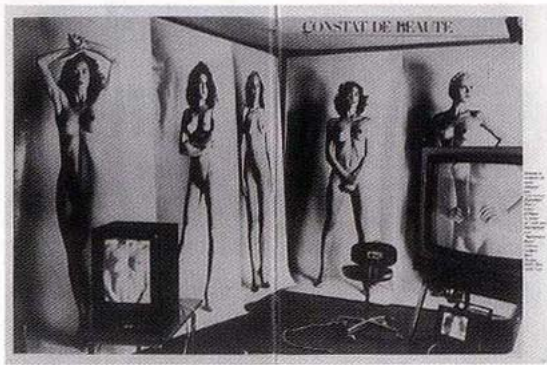
彼の中で、何かが弾けたのかも知れない。かつて記憶の中に封印された、あの類魔に満ちたヴァイマル時代のベルリンの官能が、時代を超えて甦ったようでもあった。そこには都市という箱庭の中で行われる倒錯した性の全てがあった。富と権力を背景にしたブルジョワジのデカダンス。いつもは豪華なドレスを身に纏い、誇らしげにポーズを取るモデル達も、ニュートンの前では、拘束器具で自由を奪われ、首輪を付けられ、目隠しをされ、手錠をかけられ、ロープで縛られ、ホテルの一室や劇場、時には路上に放置される。モデル達は、乱交、レズビアン、窃視、露出、男装、ボンデー

ジ、サドマゾ、医療フェチ等、ありとあらゆる性倒錯を演じなければならぬ。そして、そのエロティシズムには強烈な死の香りが漂っている。医療用のリング・ライトをファッショ写真の世界に持ち込んだのもニュートンである。思春期に実感せざるを得なかったタナトスはエロスとなつて、彼の割り上げる舞台の中でフラッシュ・バックする。「ファッションの最大の敵は倦怠だ。大柄な女性、例えば筋骨たくましいドイツ女性タイプが私を魅了する。ブルネットより、ブロンドが振った。なぜならブロンドはさらさらと輝くからだ。私は女性の顔をはっきりと見せないことがよくある。神秘的で名前を伏せた女性にするのが好きだからだ。エロティックな写真を撮るのは非常に難しい。それは、見せなければ見せない程よいからである。」

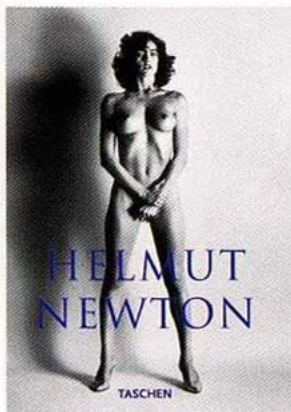
'70年代後半から'80年代にかけて、ニュートンは次々と作品集を発表していく。代表作として知られる『White Women』(76)や『Sleepless Nights』(78)、『Big Nude』(81)、『World Without Men』、『Helmut Newton-Portraits』(共に84)、『Helmut Newton's Illustrated No.1, No.2』(87)など。これらの作品集の中に表現されたエロティシズムは、そのまま20世紀



78 VOGUE FRANÇAIS



80 VOGUE FRANÇAIS



3.UMO

のエロティシズムの集大成と言っていいだろう。ニュートンの写真は、脱いでいるに聞わず、被写体の中にある倒錯や病果を剥き出しにする。

そこには、人間の持つ欲望の業の深さが、リアルに表現されている。そして、撮影されたセレブリティ達のポトトレイトは、孤独を浮き彫りにし、そのしみだらけの皺の刻まれた顔からは、彼らの常と権力さえも虚無にしてしまう程、死を予感させずにはいられない。

ニュートンの現実を洞察する、暴力的なまでに無遠慮な被写体に対する冷徹な視点。それは、20年代のノイエ・ザッパハリヒカイトの芸術家達

の冷静な視点と共通するものである。90年代に入ると、ニュートンのタナトスに対する偏愛は、ますます顕著になっていく。その傾向は、老境を迎えて死に近づけば近づく程、妖美な魅力を放っていた。91年の

「Helmut Newton's Illustrated No.1」や92年の「Archives de Nuits」の中に登場するグロテスクでグラマラスな、まるで悪夢のような世界は、まさに死への陶醉である。そして極限状態でのエロティシズムは、抗い切れない死の誘惑となって見る者を魅了する。

しかし、彼は自らの偏愛する世界の殻の中に閉じこもっているだけではなかった。アメリカ版ヴォーグ誌を

中心に積極的にファッション写真を撮影し、多くの後進フォトグラファー達に多大な影響を与えている。エレン・ヴァン・アンワイス、ステイヴン・マイゼ、テリー・リチャードソン、ヨーガン・テラー、イネス・ヴァン・ラムズヴェルデといったファッション・フォトグラファー達の撮るエロティックなファッション写真は、ニュートンの創り出したエロティシズムやフェティシズムのサンプリングと言っても過言ではないだろう。

21世紀の到来を目前に控えた2000年、ニュートンは「SUMO」を出版する。この464ページ、縦70cm、横50cm、重さ30kgという史

上最大の写真集は、「20世紀の金字塔を打ち立てた偉大な写真家への賛辞として」タッセン社のベネディクト・タッセンが考え出したものであった。日本でも20万円で発売され、今や65万円というプレミア価格がついている。わずか5年足らずという期間で3倍以上の価格が付く現実には、改めてニュートンの人気と芸術的価値の高さを再認識せざるを得ない。

ニュートンの死は、突然訪れた。04年、彼はロサンゼルスのホテル、シャトー・モーマントでの自動車事故で84年間に渡るその生涯にピリオドを打った。20世紀の混沌の象徴と言ふべき、20年代のベルリンに生まれ、歴史に運命を翻弄されながらも、

その非凡な才能を見事に開花させ、20世紀のエロティシズムを形作った。もし彼が存在しなければ、ファッション写真の中にエロティシズムの本質が取り込まれることはなかったであろう。彼の遺作となった「SUMO Landscapes」(04)を見ると、ニュートンが若き日に見た20年代のベルリンの風景を幻視しているような錯覚に陥る。都市とエロス。そして、そこに漂う濃密な死の香り。終焉の美学。最後に彼が私達に見せたのは、死の直前に見た走馬灯の中の記憶であり、戻ることのない20世紀へのノスタルジーなのだ。